

この間に起こったのが海賊林鳳のマニラ襲撃事件である。かくて植民地政庁も当初の華商誘致をはかる寛大な方針を改めて、その抑制と圧迫につとめることになった。本書はこの間の諸事実についてスペイン側史料と中国史料の双方を用いて克明に論述しており、従来の研究に一步を進めたものといえることができる。

内容は本論4章と附録1より成り、第一章「西班牙之領属菲律賓」では、レガスピのマニラ占拠までのスペインとフィリピンとの関係、この期間における華商のフィリピン諸島における貿易活動について述べ、併せてマニラ占拠後におけるその貿易の発展と、スペインの植民地経営上における貢献について説いている。第二章「中国海盜之寇擾」では、林鳳のマニラ襲撃事件の顛末と、その直後における中国・フィリピン間の官民交渉について述べ、これらが中国や中国人に対するスペイン人の恐怖と警戒心を惹起させる原因となったことを説く。第三章「華僑管制政策之開端」は華僑に対する三分税の創設と、マニラ華僑の居留地としてのパリアン設置について述べたもので、なお当時のマニラを舞台とする中菲貿易の繁栄と同地華僑の増加、華僑に対するスペイン側のキリスト教伝導工作、パリアン内部の状況についても記している。第四章「十六世紀末年之菲律賓」は16世紀末のフィリピンの内憂外患と、この期における当局の対華僑政策について述べたもので、華僑の華布着用禁止令などの華僑圧迫策の実施、さらに華僑潘和五の叛乱事件と、その後における華僑の帰国強制などの華僑圧迫の強化について詳細に説明している。なお附録は「菲律賓華僑史上的人口及居留地」と題し、1570年より1947年までの間のフィリピン華僑人口の動態、居留地の変遷に関して諸文献より得た資料を年代順に列記したものである。

要するに本書は表題の16世紀のフィリピン華僑の研究としてはすぐれたものであるが、フィリピン華僑史の上で重要な17世紀以後には及んでおらず、この点甚だ惜まれる。続編の出現を期待する次第である。なお著者は記していないが、Blair and Robertson: *The Philippine Islands*. 55v. の中から華僑史料を抽出列挙した呉景宏氏の『西班牙時代之菲律賓華僑史料』(南洋研究, 第1巻, 1959). が出ており、フィリピン華僑史研究に頗る便利であるので附記しておく。

(藤原利一郎)

Thai-English Student's Dictionary. Compiled by Mary R. Haas, with the assistance of George V. Grekoff, Ruchira C. Mendiones, Waiwit Buddhari, Joseph R. Cooke, Soren C. Egerod. Stanford University Press, Stanford, California. 1964. xx+638p.

この辞典は現在手にし得るタイ語の辞典として最も新しいものであると同時に、最もすぐれたものだといえるであろう。ここでいう「すぐれた」というのは、単に語の意味や品詞がわかるというだけでなく、その単語の用いられ方、あるいはタイ語の中での動きかたがよく解るといことである。この事は、タイ語を母国語としない我々にとって、特に有難いことである。こういった意味で、タイ語を習い始めたばかりの人達にとっても、またそれを専門的に研究している人達にとっても、本書は非常に有用である。本書をこの様な有用な辞典としている要因として次の様な点をあげることが出来るであろう。

① 徹底した音素表記が用いられていること。従来のタイ語辞典は、それが英語を母国語とする人達を対象にするものであれば、英語の正書法にもとづく表記法を用いていた。これに対し本書では、誰にでも容易に理解出来る音素表記を用いている。この表記法は、同じ著者による *The Thai System of Writing*. Washington D. C., 1956. のそれと原則的には同じであるが、stress 及び intonation が表記されている点で、本書の方が更にすぐれているといえる。stress については、例えば、/phaasǎa/ 《言語》における第一音節 /phaa/ は、実際の会話ではしばしば弱められて [phə] となるが、第二音節の /sǎa/ は常に上昇型のトーンで発音される。すなわち /sǎa/ は “stressed syllable” である。この様な “stressed syllable” はいつも /' / でもって明記されている。また intonation は三つの型に分類されて、それぞれ ↑, →, ↓ でもって表記されている。更に綴字と発音とが余りにかけ離れている場合には * を符して注意をうながしている。以上の様な配慮がはらわれている点から、本書の表記によれば、実際の発音をかなり正確に知ることが出来るであろう。

② 必要に応じて単語の “level” が示されている。例えば、《to eat》を意味する最も一般的な形 /kin/ は “common” であり、これに対して /dɛŋ/ は、

同じ《to eat》でも、“vulgar”であるといった様に、単語の level が示されている。この社会的に定まった level は、我々外国人にとって最も困難な問題の一つだといえるが、この点について説明が加えられているということは、この辞典を非常に有用なものとしている。本書では、archaic, colloquial, common, deferential, derogatory, elegant, epithet, euphemism, expletive, figurative, idiomatic, illiterate, literary, obsolete, obsolescent, royal, sacerdotal, slang, vulgar, written の計 20 の項目が用いられている。

③ 各単語について、その単語を中心として作られる phrases や idioms があげられており、反意語、同意語も適当に示されている。更に、必要な場合には、“Note”の項を設けて、当該単語の用い方や似た意味を持つ他の語との相異などについて、例文と共に説明が加えられている。この様な意味で、本書は単に受動的に引くだけの辞書としてのみならず、タイ語を書き話す場合にも充分役に立つと考えられる。しばしば用いられる固有名詞、称号名、機関の名称なども取り入れられており、実用的である。

発音について疑問な点として、例えば、《本》を表わす語は /nǎŋsǎy/ が普通であるが、本書では /naŋsǎy/ と表記されている。この様な相異はタイ人の間でも個人的に変動のある可能性が強いから、両方を記して注を付すべきであろう。なお、p. v, 37 行の《to be big》を意味するタイ語形は誤植で、正しくは khoo khwaaj のかわりに too tàw を用いる。本書の最初の部分に付された Brief Description of Thai も有益である。 (桂満希郎)

Hla Pe: *Burmese Proverbs*. John Murry, London, 1962. ix+114p.

本書は、School of Oriental and African Studies, University of London の教授でありビルマ語研究の第一人者の一人である Hla Pe 教授による。ビルマ語諺集とでもいうべきものである。著者自身も序文で述べている様に、本書はビルマ語の諺の網羅的な収集ではなく、また学問的な研究書でもない。しかし、ビルマ語を学習しテキストを読む段になると、役に立つところ大である。日常の会話、あるいは小説や新聞などにおいても、諺の用いられる頻度は、日本語

においてよりもビルマ語においての方が、はるかに高いといえるであろう。これらの諺は日本語の感覚からすれば意味を把握することの極めて困難なものが多いが、その様な際、本書は手ごろな参考書としてよく役に立つであろう。

本書は、Introduction, 本文, 原文から成る。Introduction においては、ビルマの諺に関する簡単な説明のほかに、Political Setting, Cultural Setting, Economic Background, Social Environment について、諺と関連を保ちながら、概略的な説明が加えられている。本文におさめられた諺の数は 496 であり、Human Characteristics, Human Behaviour, Human Relationships, The World, Man, の五項目に分離されている。本文にはこれらの諺の英訳とそれらに相当する英語の諺とがあげてあり、原文は romanize された形で巻末にまとめられている。代表的な諺は大体カバーされているが、明らかに外国からの借用であるものや、単なる言葉の遊戯、例え話などの類は除外されている。この撰択、分類の基準がややあいまいに思われるが、研究書ではないから、やむを得ないであろう。

上に述べた様に、ビルマ語を読む際の参考書としての実用的な意味以外に、本書にあげられた原文と英訳、あるいは英語の諺とを対照すれば、ビルマ語の簡潔な表現法とかいわゆる「ビルマ語らしさ」を理解するという意味からも興味の持てる書である。この点から、巻末にまとめられた原文は、本文の英語と対照してあげられていた方がより良かったであろう。

(桂満希郎)

William A. Smalley: *Outline of Khmu? Structure. An Essay of the American Oriental Society No. 2*. New Haven, Connecticut, 1961. xix+45p.

クム語はラオス北部を中心に東北タイから北ベトナムにまで分布するモン・クメール系(パラウン・ワ語群)の言語であるが、これまでにこの言語について報告されることはあまりなかった。本書は著者が 1951—3 にルアンプラバン周辺で採録した資料にもとづく *Outline of Khmu Structure* (University Microfilms Publication No. 17,081. Columbia Univ. dissertation. 1956) を僅かに短かくしたものであ